

メッセージアウトライン ヨハネ12：37~ 50「だれが信じたのか」

「多くのしるしを行なわれたのに、彼らはイエスを信じなかった」(37)イエスは今まで多くのしるし、奇蹟を行われてきた。→2, 5, 6, 9, 11章参照
しかし、それでも人々はイエスを救い主と信じなかったのである。

実はユダヤ人たちのこのような不信仰は旧約時代から預言者によって預言されていたことであった。ここでヨハネはイザヤ53:1を引用している。(38)さらにヨハネはイザヤ6:10のことばも引用する。(40)これはイザヤがエルサレムの神殿において神の幻を見、主の預言者として献身し、召しにこたえる時の記事であるが、その時、彼が主から受けたことばがこれであった。つまりイザヤが神のことばを語っても語っても人々は心をかたくなにして信じないというメッセージである。そしてイザヤが預言したことは、それから七百年以上もたったイエス時代のユダヤ人においても成就したとヨハネは言うのである。「イザヤがこう言ったのは、イザヤがイエスの栄光を見たからで、イエスをさして言ったのである」(41)「イエスの栄光」とは苦難のメシヤとしての栄光である。それは伝統的なユダヤ人たちの解釈とは違うものであった。それゆえ彼らはイエスを信じ受け入れることができなかったのである。

ヨハネはそれにもかかわらず、ユダヤ人の最高議会の中でもイエスを信じる者がたくさんいたと述べている。(42)しかし彼らはその信仰を告白しなかった。それは、「会堂から追放されないため」、つまりユダヤ教から破門され、ユダヤ人として社会の交わりから締め出されるという恐れゆえであった。「彼らは、神からの栄誉よりも、人の栄誉を愛したからである」(43)とヨハネは、はっきりと言う。これは当時のユダヤ人指導者のことだけでなく、いつの時代にも当てはまる問題である。神にほめられるよりも、人にほめられることを求める。神の栄光を求めないで自己の富、快樂を求める。神のさばきを恐れず、人の批判を恐れる。心の中でイエス・キリストの救いのこと、その福音に「なるほど」と思っても、口でその信仰を言い表すことができない。こういうことがしばしばある。そのような考え方からは信仰者としての力ある生き方は出てこない。私たちはどうだろうか。

次の44~50節は今までイエスが語られてきたことの総まとめともいえる箇所である。イエスを信じる者は神を信じる者。イエスを見る者は神を見る者。(44~45)これは父なる神とイエスとの一体性を示す。イエスは世をさばくためにではなく、世の光として世を救うために来られた。(46~47)→ヨハネ3:16~17イエスが話したことばがさばく。(48)→ヨハネ3:18b~19,36 イエスは父なる神がお命じになったことをそのまま話された。その内容は永遠のいのちである。(49~50) すなわちそのことばを信じ受け入れる者は永遠のいのちを受けるのである。

これらのことから、イエスはその本質においても、その使命においても、そのことばにおいても、すべて父なる神と一体であることがわかる。

私たちは私たちが愛し、私たちの罪のために十字架につけられ、死んで、その贖いを成し遂げてくださったイエスを心から愛し、人々の前でも公に信仰を言い表し、従っていく者となりたい。→マタイ10:32~33